オーディオ実験室収載

TruPhase の活用(12)
―音源の位相確認(12)―

１．はじめに

TruPhase の位相反転機能を利用して音源の位相確認を行っていますが、前報(11)に引き続き CD の位相確認を行います。

２．TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認計画

前報(11)と同様、前報(1)と同じ経路で CD の位相確認を行いつつ、バッハの CD を聴いていきます。

CD ドライブ→fidata HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→TruPhase
→300B シングルアンプ

試聴した CD 音源は、バッハの作品で下記のとおりです。

エラート　WPCS-13633
J.S.Bach　チェンバロ協奏曲集
ジャン・ロンドー（チェンバロ）他

SATIRINO　SR061
J.S.Bach　イタリア協奏曲他
ケネス・ワイス（チェンバロ）

SATIRINO　SR091
J.S.Bach　Goldberg 変奏曲
ケネス・ワイス（チェンバロ）

エイベックス　AVCL-25390
.S.Bach　平均律クラフィーア曲集第 1 巻他
曽根麻矢子（チェンバロ）

３．TruPase の位相反転機能による音源の位相確認結果

上記 CD について、Brooklyn DAC+での位相反転と TruPhase での位相反転の結果が同じになるかどうかが焦点です。

音量調整を容易にするため、Brooklyn DAC+では位相反転させず、TruPhase で位相反転させた状態で TruPhase のヴォリュームを固定し、TruPhase での位相反転では、Brooklyn DAC+でのヴォリュームでの調整だけにしました。

そして、Brooklyn DAC+では位相反転させないで、TruPhase での位相反転有り無し

で聴いていきます。
ロンド―盤は、位相反転させますと、定位が曖昧になり音の焦点がぼやけます。位相反転させないと定位が明瞭で、チェンバロやバックのアンサンブルの音の質感が明瞭で、通奏低音も押出がよくなります。
ワイスのイタリア協奏曲等の盤は、位相反転させますと、もともと音像は大きめですが、散漫になります。位相反転させないと、音の粒立ちが明瞭になり、響きが明瞭になります。
ワイスの Goldberg 変奏曲の盤は、位相反転させますと、ともと音像は大きめですが、散漫で過度の広がり感があります。位相反転させないと、音像は大きめですが、音の粒立ちが明瞭になり、響きが明瞭になります。
曽根麻矢子盤は、位相反転させますと、定位が曖昧になり、過度に広がり感がでてきます。位相反転させないと定位が明瞭で、チェンバロの音の芯が立ってきます。
ロンド―、ワイス、曽根麻矢子はいずれも生の演奏を聴いており、収録場所やチェンバロの機種は違うかもしれませんが、CD で聴いても生々しくディテールまで再現してくれます。

４．まとめ

TruPhase での位相反転と Brooklyn DAC+での位相反転の結果は、ロンド―、ワイス、曽根麻矢子のいずれの盤も近年の録音であり、正相であることが分りました。

以上